農山村における地域スポーツ組織の社会的意味

後藤　貴浩

Takahiro Goto: The social significance of a local sports organization in a rural farming village. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 211–224, June, 2013

Abstract：The objective of this research was to examine the social significance of a local sports organization based on fieldwork conducted in Nakatsue Village from May 2011 to January 2012. Specifically, we focused on the soccer team ‘‘Le Lion Nakatsue’’ which was formed on the occasion of Nakatsue becoming the host of Cameroon’s training camp for the World Cup in 2002. We examined the significance of ‘‘Le Lion Nakatsue’’ in the lives of the young generation of Nakatsue where the village society is rapidly dwindling.

Historically and geographically, disparity among the districts in Nakatsue Village has been considerably large and thus the area never had a feeling of communal unity. Under such circumstances, ‘‘Le Lion Nakatsue’’ served to unite the young people. Furthermore, analyses of the relationships among members and local organizations revealed the following:

- A variety of relationships existed between the members concerning daily life such as work, districts and schools.
- Young villagers were performing roles within various local organizations for the young, such as the Youth Group, ‘‘Le Lion Nakatsue’’ and the ‘‘Local Patrol Group’’.
- The local organization activities of the young generation had become multilayered.
- Young villagers were sharing a deep and stable relationship similar to that seen in traditional Japanese mutual aid associations such as tanomoshiko.

In Nakatsue Village where the population continues to decrease and job opportunities for young people are scarce, ‘‘Le Lion Nakatsue’’ served to unite the young villagers as an ‘‘organization that will exist for a considerable period of time’’ while also serving a socially significant role in providing opportunities for carrying on relationships shared by the young generation.

Key words：life, relationship, local organization
キーワード：生活，関係性，地域組織

1. 課題設定

大分県日田市中津江村には，2002年日韓W杯カメルーンキャンプを機に設立された村で初めてのサッカーチーム「レリオン中津江」がある．「小さな村の大きな挑戦」と銘打たれた同キャンプは，当時の中津江村を一躍全国的な知名度の村へと押し上げた．W杯終了後，会場となったスポーツセンターの年間利用者数は，目標の3万人を上回る38,000人（2010年度）を数え，Jリーグチームのキャンプやカメルーン杯少年サッカー大会が毎年行われるようになった．低迷していた村最大の観光施設である金山観光施設[注1)]では，「カメルーン中津江村キャンプ記念館」をオープンし，カメルーンにちなんだ物産品を加工・販売している．また，2010年南アフリカW杯では，日本戦に向けたマッチフラッグづくりに取り組み，試合当日のパブリック・ビューイングには村民の約4分の1（280名）が参加しカメルーンを

熊本大学教育学部
〒860–8555　熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40–1
連絡先　後藤貴浩

Faculty of Education, Kumamoto University
40–1 Kurokami 2-chome, Chuo-Ku, Kumamoto-shi, Kumamoto 860–8555
Corresponding author　goto5555@gpo.kumamoto-u.ac.jp

応援した．しかし，現在（2012年），「レリオン中津江」は活動を休止している．村の青年層にとって唯一の地域スポーツ組織が結成後およそ10年で消滅しつつある．

森川（1988）は，地域スポーツ組織の発展パターンを整理し，クラブメンバーの拡大を基準に，スポーツ運動型のクラブ自治の確立へと向かうべき成長段階を設定している．そして，それぞれの段階に応じて，クラブづくりに必要な具体的方策を提示し，最終的にはスポーツにおける経験を通した地域主体性形成こそが重要である(森川，1988，p. 55）としている．また，厨（1990）は，我が国の地域スポーツクラブの多くが，「小規模で施設的条件，経済的条件にも恵まれず，また，大会や行事への参加をきっかけに容易につくられ，試合前の集中的練習だけが中心的な活動であるという実態を考えるとき，スポーツクラブに期待されているような社会的機能を十分果たすことはきわめて困難である」（厨，1990，p. 86）と述べている．さらに，地域におけるクラブ活動がコミュニティ形成の一翼を担うための人間関係のあり方として，「『私的自由』がそれほど犯されず，『適当に距離を置いたうえで理解と共感が得られる』さわやかな人間関係が醸成」（厨，1990，p. 91）されなければならないとしている．近年では，松尾（2010）が，スポーツを基盤としたコミュニティ形成を考える場合，「重要なことは，自律的連帯主義に基づく『地域性』『場所性』『共同性』がいかに立ち上がってくるかである」（松尾，2010，p. 168）と述べている．そのためには，スポーツによる個人の発達，あるいはスポーツ組織活動において公共圏を創出[注2)]することこそが地域社会形成への条件となるとしている．いずれも，地域スポーツ組織が地域に永く存続し何らかの社会的機能を果たすためには，そのあるべき姿に向けた内発的発展が重要であるという主張と理解される．このような議論を参照するならば，過疎化する農山村の限られたメンバーで構成され，時には暮らしの私的な領域にまで踏み込むような関係性[注3)]を持つ「レリオン中津江」の休止は必然的なものであり，その内発的発展の無さがゆえに公共圏を創出するに至らなかった典型的な事例とされるであろう．

ところで，このようなコミュニティ・スポーツ論や国民スポーツ論，さらに近年のスポーツ公共圏の議論に対しては，松村（1993）や伊藤・松村（2009a）が批判的に検討している．松村は，地域社会とスポーツに関する都市社会学からの批判[注4)]に答えるためには，「スポーツ社会学の領域で『生活』を捉える枠組みを提示し，スポーツのコミュニティ形成における有効性と限界を示すべき」（松村，1993，p. 179）だということを主張した[注5)]．また伊藤・松村は，新しい公共を基底に据えスポーツ公共圏の可能性について言及する新しいコミュニティ・スポーツ論（菊，2000；松尾，2000）も，従来のコミュニティ形成論においてスポーツが消極的な位置に置かれたように，今日の新しいコミュニティ形成論との間にも大きな落差があると指摘している（伊藤・松村，2009a，p. 82）．そのうえで，彼らは「潜在的な共同性」の存在を踏まえスポーツを捉えるという中島（2000）や玉野（2005）の主張を取り上げる．そして，スポーツの共時的に人々をつなぐネットワークという意味の「場繋ぎ」機能ではなく，通時的に場を継承してきたスポーツの実践力に目を向けるべきであると述べている（伊藤・松村，2009a，pp. 83-84）．

では，そのような研究視角に立つならば，先の地域スポーツ組織研究における内発的発展論やあるべき論において貶価されるであろう「レリオン中津江」はどのように捉え直されるのであろうか．W 杯という華やかなスポーツイベントを機に産み落とされた「レリオン中津江」の中津江村における社会的意味は一体何なのか，これが本研究の課題である．

2. 分析的立場と調査の方法

社会学者の見田宗介は，東日本大震災後の社会の在り方について問われ，成長が無限に起らないと困るという経済，社会構造，そして精神構造からの方向転換の必要性を説いている[注6)]．また，

広井（2009）は，現在を「定常化の時代」と位置づけ，「有限性」と「多様性」を要素とする新たな価値原理が求められているとする（広井，2009，pp. 271-272）．矢作（2009）も，都市政策の立場から国内外の都市計画を取り上げ，「『量的な拡大競争主義にサヨナラしなければならない』という社会的な合意が形成されつつある」（矢作，2009，p. 9）と指摘している．一方，スポーツは産業資本主義的原理を中軸とする近代化過程において重要な位置を獲得し，時には現代社会を表象するものとして取り扱われるようになった．まさに現代社会のスポーツは，経済・企業原理が優先する近代化社会と歩調を合わせ拡張・拡散してきたと言えるであろう．しかし，先に述べたように果てしない成長を目指す方向からの転換が主張されるという状況を鑑みるならば，改めて地域社会とスポーツの関係についても検討しなければならない時期にあるといえる．

では，このような視点に立った場合にいかなる分析アプローチを用いるべきであろうか．本研究では，個々のスポーツ活動を自立したものあるいは自立すべきものとして捉え，そのうえで地域社会との関係を議論するアプローチをとるべきではないと考える[注7)]．そうではなく，それぞれのスポーツ実践が展開される社会構造や生活の在り様との関係を踏まえたモノグラフ的な分析アプローチをとることとしたい．このような分析的立場の1つとして徳野貞雄(2011)の生活農業論がある．徳野は現在の農業・農村問題を生命・生活原理と経済原理の対立として捉え，従来のモノとカネに重点を置いた生産力農業論ではなく，ヒトとクラシに重点を置いた生活農業論の重要性を説いている（徳野，2011，p. 11）．スポーツ界は，自らの拡張・拡散のために産業界との結び付きを強め，ますますビジネス化，メディア化，バーチャル化しつつあるといえる．まさしく経済・企業原理優先の様相を呈している．しかし，前述したように地域社会は「有限性」（広井，2009，p. 272）や「縮小都市の時代」（矢作，2009，p. 18）と表現されるような時代になりつつある．そのような地域で展開・実践されるスポーツもまずは「生命・生活原理」（徳野，2011，p. 10）との関連で把捉されなければならないと考える．このような分析的立場は，前述の松村・伊藤らにも通底したものであり，近年，生活論的アプローチとして松村（2006）や伊藤・松村（2009b）などによって実証的な成果が報告されつつある[注8)]．この生活論的アプローチについて前田（2010）は，「『主体的な市民』といった原子化した個人ではなく，家族あるいは生活組織[注9)]，地域社会における社会関係の中で生きる実体的な生活者」に着目し，「生活条件の変化とその内部における相互作用によって常に変化するダイナミズムの中にスポーツを位置づけて分析する」（前田，2010，pp. 24-25）としている．本研究でも同様の分析的立場に立ち，急激な地域社会構造の変化の中で「縮小型社会」（徳野，2010，p. 20）へと向かう過疎農山村を対象に，そこで展開されるスポーツの意味を問い直すこととする．

具体的な方法としては，大分県日田市中津江村を対象にフィールドワーク[注10)]を行った．中津江村は，農山村でありながら，金山開発による爆発的な人口増大に伴う急激な都市化，さらには観光開発やW杯による交流人口の増大などを経て，縮小型社会へと向かう地域として捉えられる．このような衰退化しつつある中津江村を対象とすることは，これからの地域社会とスポーツの関係を問い直すうえでも重要な視点をもたらすものと思われる．

3. 中津江村の地域社会構造と生活

中津江村は大分県西部に位置し，福岡県および熊本県との県境にある山村で，森林が93％を占める．明治22年の町村制施行に伴い旧栃野村と旧合瀬村が合併して中津江村が誕生，2005年の市町村合併後は日田市中津江村となっている[注11)]．津江川沿いおよびその両脇の切立った山あいに各集落が点在している．旧村名がそのまま大字として使われており，津江川の上流部が合瀬，下流部が栃野となっている．さらに合瀬は自治会の単位でもある行政区として鯛生と丸蔵，栃

野は川辺と野田に分かれる．これら４つの区は歴史的・社会的な関係でいえばさらに集落ごとに細分化されるものであるが，一般的な都市部の行政区とは異なり，概ね関係性の強い安定した地域の枠組みとして理解される．

人口動態[注12]についてみていくと，中津江村も他の農山村と同様に高度経済成長期から人口流出が続いたが，1972年の金山閉山，1973年のダム建設[注13]の影響が大きく，他に類を見ないほどの減少率を記録することとなった．1970年から2011年の人口推移を区ごとに見ると，鯛生1,217人（332世帯）→164人（77世帯），丸蔵860人（182世帯）→190人（83世帯），川辺995人（226世帯）→423人（168世帯），野田357人（85世帯）→282人（99世帯）となっている．鯛生の減少が著しく，1980年にはすでに485人（167世帯）となっており閉山後急激に人口流出が進んだことがうかがえる．一方，野田はダムによる水没地区が含まれるものの，それほど減少しておらず，世帯数にいたっては増加している．野田は車を使えば日田市まで40分，大型スーパーなどがある熊本県小国町までは20分，さらにダム建設に伴う村営住宅の建設などの環境的要因が影響し，上流域の合瀬（鯛生，丸蔵）からの村内移動が行われたと考えられる．村全体の高齢化率は45.1％（2011年度）と非常に高く，地区ごとに見ると，鯛生51.2％，丸蔵57.4％，川辺45.6％，野田32.6％とここにも大きな差がみられる．

産業構造を見ると，金山やダム工事が盛んな1970年代までは第二次産業従事者の占める割合が大きく，それと同時にサービス業等[注14]も展開されていった．しかし，これらに従事する者の大半は村外からの来住者であり，閉山，ダム完成とともに村外へと流出していった．土着の者の多くは農林業を営んでいるが，農業については，村全体の地目別面積における田畑の占める割合はそれぞれ1.1％と0.7％と耕地面積が狭く農耕経営は非常に零細であったといえる．一方林業に関して，富来・河野（1981）によると，山林の大部分は私有林でしかもその80％が村外地主となっているという．村内の林業従事者の大半は山子で，農業の傍ら植林，下草刈り，間伐に従事しているため，林業で栄えた日田地域のイメージとは異なり，中津江村民の林業による所得は低いものであった．さらに，大野（1982）は，林野を通しての支配・被支配の構造が戦前と基本的に変わっていないとし，「大林野所有と林業労働者の階層分化という，農村地帯には見られない現象がみられる」（大野，1982，p. 4）という．

中津江村の村民の生活構造を分析した先行的研究として，山本ほか（1998）の取り組みがある．山本の調査によると，都市部の「選択的小家族化」とは異なる戸数減少率を上回る人口減少の進行という「過疎的小家族化」が進んでおり，それは日田市までの距離に比例することを明らかにしている（山本，1998，p. 19）．また，村民の定住意識が高く（82.4％），都会に住みたいと思う者は少ない（8.4％）ことが報告されている．高野（2009）は村の地域集団に関する調査で，伝統的地域集団や年齢階梯集団への参加率の減少が目立つこと，市町村合併を機に自治会への参加率が上昇したこと，婦人会，講，老人会などの伝統的な地域集団の衰退とスポーツ，趣味，娯楽などの任意加入集団への参加の拡大がうかがえることを報告している（高野，2009，p. 22）．さらに重要なこととして，高齢者の地域組織活動の状況について，集落を維持するために必要な社会組織と，親睦や娯楽的な要素の強いそれとが重層的に展開されていることを明らかにしている（高野，2009，p. 20）．

最後に，区ごとに地域社会構造を確認する．まず鯛生であるが，近隣の世帯で構成される班は[注15]，1970年には27班が存在したが2005年の日田市への合併時に８班，さらに2011年には４班となっている．区長はこの現状を「アッという間になくなっていった．自分もいつ出ていこうかと話しているんですよ．あと５年もしたらここはホントなくなりますよ」と語っている．自治会の活動としては，総会のほか月１回の役員会と敬老会行事や道路愛護活動ぐらいであり，自治会全体で何かするということは特にないという．自治会費も取っておらず，鯛生小学校の100年祭基

金を活用しているということであった．集落ごとの常会も行われていない．金山の閉山とともに瓦解していく状況について区長は「鯛生はバラバラですよ．やっぱり金山の影響でしょうね．いろんな血が入ってきたり，そういった人との付合いがあったりですね」と語っている．また，先に述べた林野支配構造の影響もあり，元の有力者との関係が難しく様々な地域での活動にまとまりがないと述べている．長い伝統のある地元の神社祭りについても，従来は総代がいて氏子が交代で祭りを運営してきたが，今ではそれもできず区長が毎年すべてを取り仕切っており，自分がいなくなったら祭りはなくなるだろうという．このように，閉山後，その独特の社会構造の影響もあり，一気に瓦解していく様相が確認された．

同じく上流域の山あいに位置する丸蔵も人口流出が激しく，高齢化の進んだ地域である．しかし，鯛生ほど村外からの来住者[注16)]の数は多くなく，徐々に進行していったと思われる．したがって，人口は大幅に減少したものの1970年に16班に分かれていた集落は2011年でも15班が存続しており，それぞれの集落で常会などの寄り合いも行われている．後述するように地域の頼母子講が行われており共同性が強く残る地域であると理解される．また，青年層の集まりである「親和会」が地域運営に積極的に取り組んでおり，夏祭りの運営や中津江村の「ふるさと祭り」への出店なども行っている．自治会としては，1世帯年間6000円の会費を集め，総会のほかスポーツ大会や敬老会など様々な行事に取り組んでいる．自治会公民館の周囲には行政に働きかけて造成されたグランドゴルフ場やゲートボール場があり，その維持管理に住民が積極的に係っている．宮園集落にある宮園神社では約800年以上も続く「麦餅つき祭り」（大分県指定無形民俗文化財第1号）があり，丸蔵のシンボル的存在となっている．鯛生と同じく金山労働者が少なからず移住していたが，このことについて区長は「都会から来た人が一気にいなくなった後は，本当の中津江の人間だけ，ここに残って住まなくちゃいけない者だけが残った．そしてどうにか集落を維持してきたんです」という答えが返された．人口減少・高齢化，そして集落の小規模化という流れの中でも，丸蔵の人々は共同的な関係性を引き継ぎながら日々の暮らしを送っているのである．

川辺は，役場や小学校・幼稚園などがある栃原地区，商店や小規模の事業所，商工会館，郵便局などがある川辺地区，さらに山あいに点在する集落で構成される中津江村の中心地である．班は1970年の19班から現在の17班とそれほど減少しておらず，集落単位での常会や清掃活動が行われている．自治会活動も盛んで，総会のほか，月1回の班長会議があり，組織も会長，副会長，会計，体育部長，環境福祉部長，教育文化部長などの役職が決められている．特に大きな行事は，10月に開催される自治会体育部主催のスポーツ大会で，計3日間にわたり実施されている．その他，日帰り研修会（毎年40名ほど参加），年2回の防犯パトロール，年1回の防災パトロールが行われており，自治会関係の行事が月1回程度は開催されているという．年間の自治会費は7,200円となっている．日田市や熊本県小国町への交通アクセスが良く，休日には市街地へ買い物や映画，習い事に行く人も多く見受けられる．また，公民館のサークル活動や自主的な地域活動グループもあり，自治会の組織化された活動と合わせて比較的地域運営がスムーズに行われている地域といえる．

野田は4つの区の中で最も人口減少が少なく，高齢化率の低い地域である．しかし，もともと山あいの集落を中心に構成されており，1970年の人口数はもっとも少ない．水没した集落が2つあり，そのほとんどが挙家離村であったことから集落消滅，人口減少に向かうところであったが，市営住宅の建設により若い夫婦世帯が村内の他地区から移住したため，班の数自体は1970年と同じ8班となっている．移住してきた若い夫婦世帯は，特に鯛生や丸蔵の上流域からの移住であり，ほとんどの場合その親世帯は元の区に残っている．区の人口における市営住宅の占める割合は40.4％（114人），世帯数で34.3％（34世帯）となっており，山あいの住民と村内出身の団地住民

が混住している地域といえる．市営住宅を含む各班では今でも常会が行われている．しかし，自治会の活動は活発ではなく，総会と2か月に1回の役員会以外はほとんど行事等が行われていない．区長によると，市営住宅の住民は日田市などへの共働きが多く旧集落の住民とは生活時間が異なるため，自治会単位で何かやるということは難しいという．ただし，若い夫婦世帯が地域のことに無関心かというとそうではなく，班内での頼母子講や親世帯の住む区や集落の活動には比較的取り組んでいる．このように野田は，区という地域の枠組みではなく，市営団地を含む各班において一定の地域的共同性が存在しているといえる．

ここまで見てきたように，中津江村は歴史的・地理的状況から見て村として共同体的な統一感をもつ地域ではなかったのである．そのような状況であったからこそ，旧村役場の地域に果たす役割は，単なる行政組織という以上に大きかったともいえる．もともと大きな事業所や基幹となる産業がなかったため，旧村役場は貴重な雇用の場であったと同時に，村のリーダーを育てていく場でもあった．例えば，商工会女性部のGは「昔から，中津江は役場の職員が地域の核となって活動していたから，その周りに私たち村民があり，商店があり，という感じで回っていた．地域運営にはリーダーが絶対必要なのですよ．中津江の場合，そのリーダーが役場だったのですよ」と語っている．先に見たように，各区の地域社会構造および生活構造が大きく変動し，区ごとの格差が生じていくという状況の中で，旧村役場は金山観光施設建設，スポーツセンター建設，そしてW杯カメルーンキャンプと発展論的な地域振興の仕掛けづくりを行ってきた．そして，これらの取り組みを通して，どうにか村全体の社会経済的な基盤を維持し，交流人口の維持に努めてきたといえる．その流れの中で，W杯カメルーンキャンプという出来事は，関連する様々なイベントや活動を含め，結果として中津江村民としての貴重な共同体験となり，彼らに一定の社会的統一感をもたらしたのである．その際，マスコミを通して全国民から注目されると同時に，自分たちもその視聴者として自らが暮らす中津江村を再確認するという過程があったことも大きく影響したのではないかと思われる[注17)]．

4. 地域組織活動における青年たちの関係性

前節でみてきたように中津江村の地域社会構造の変化は，住民の生活や地域に対する意識にも大きな影響をもたらしてきたといえる．ただし，その影響は村全体で一律に生じたものではなく，それぞれの区や集落において大きな差異が認められる．このように地域生活のあり様が変化していく中で，村の青年たちの地域組織活動はどのように展開されてきたのであろうか．まずは，本研究の主題である「レリオン中津江」のメンバーの関係性についてみていきたい．

「レリオン中津江」は，W杯カメルーンキャンプの翌年2003年に商工会青年部のメンバーを中心に結成された．結成時は，小学生から50歳ぐらいまでの50人ぐらいが参加し楽しくにぎやかにやっていたという．しかし，徐々にサッカー経験のある若者が村内外からチームに入ってきたこともあり，勝ちにこだわるのか，楽しくやっていくのか，ということが問題となった．そこで，監督のAとキャプテンのMが相談して，勝利を目指して取り組むことを決めた．その結果，メンバー数は減少したものの，2004年には郡民体育祭で優勝し，県民体育祭に郡代表として出場した．2005年からは日田市で開催されていたウインターリーグに参加し，2009年まで出場した．また，島根県出雲市で開催されていた「キャンプ地市民サッカー交流試合」に2004年から3年間出場し，2004年，2005年には優勝している．この遠征では村所有のバスを使用し，役場職員の帯同や村からの補助金などもあり中津江村の公認的な行事となっていた．しかし，2010年にはメンバーの集まりも悪くなり，2011年は全く活動していないということであった．現在のところ，チームには村内に在住しているあるいは在住した[注18)]13名を含む20名弱が在籍し，結成当時のメ

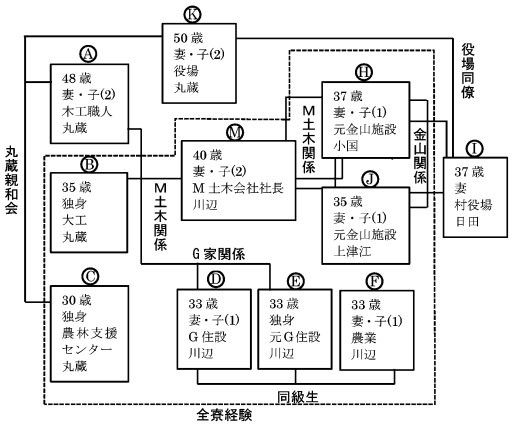

図1　「レリオン中津江」のメンバーの関係性

ンバーも数名残っている．Mにチームが現在のような状態になった理由を尋ねると，若者の数が少ないということもあるが，チームとしての目的をどうするかということを決めたことが影響しているのではないかと述べていた．

それでは，現在もチームに残っているメンバーの関係性についてみていくことにする．図1にはメンバーの中で村内に在住しているあるいは在住した13名のうち，中心的にチームの活動に関わってきた11名の関係性について示した．

彼らを切り結ぶ関係性は，大きく仕事関係，地域関係，学校関係に分けられる．中でも，基盤となるような産業のない村では，青年たちにとって雇用の場の確保は大きな課題となっており，彼らの関係性においても重要な意味を持つ．金山閉山やダム工事終了後の村では，村役場と金山観光施設が貴重な雇用の場となっていた．しかし，それも日田市への合併や観光客の減少によって，その機能を極端に減少させた．IとKはともに中津江村役場職員であったが，2005年の合併後は日田市の本庁勤務となり，Iは生活の拠点を完全に日田市に移している．金山観光施設で働いていたHとJも現在は別の職に就き，村外に転居している．このように若者の働く場の確保と定住問題は彼らの関係性を維持するうえで少なからず影響を与えている[注19)]．しかし，彼らはお互いの関係性をどうにか維持しようと試みているのである．

例えば，チームの中心的存在であるMは従業員を12名ほど抱える小さな土木会社を経営しており，現在，Hの雇用を検討しているということであった．同様に，親子二代で大工を営むBも仕事が少ないため日田市で出稼ぎ的就労に就いており，彼もまたM土木での雇用を申し出ているとのことであった．さらに，前述の商工会女性部のGの親族は，ガソリンスタンド，住宅設備会社，運送会社，商店を営んでおり，そのうち住宅設備会社の跡取りであるDのところで同級生のEは職を得ていた．また監督のAはG家の出であり，Dとは従弟同士でもある．次に，地域関係がある．特に丸蔵の「親和会」は中津江村で最も活動の盛んな青年層の地域組織であるが，そのメンバーであるA, C, Kは「レリオン中津江」の発足時からのメンバーでもある．「親和会」は丸蔵小学校の廃校を機に地区の青年たちが地域のことを考える場をつくろうと1988年に結成された地域組織である．30歳代から60歳代までの20人弱のメンバーが，毎月地区内の6か所の公民館を回りながら定例会を実施しているほか，祭りの準備，地区のスポーツ大会や敬老会の開催などに取り組んでいる．Kによると，毎月必ず2～3回はみんなで集まって何かをやっているということであった．A, C, Kの3人は，このような地域の安定した関係の中で「レリオン中津江」に参加しているのである．学校関係としては，D, E, Fのような同級生の関係もあるが，A, Kを除く全員が中学時代に寮生活を経験しており，学年，年齢を超えて同様の共同活動を経験している．村の中学校では，たとえ通学可能な距離にあっても，全員が寮に入ることになっており，Mによると，毎朝5時40分に起床し，全員で乾布摩擦，詩吟，縄跳び，朝礼，英会話などを行っていたという．Mは非常につらい集団行動であったが，今では自分たちの自慢でもあると語っていた．

このように彼らの間には，日常的あるいは継時的な複数の関係が存在しており，「レリオン中津江」は，地域に埋め込まれたこのような関係性をベースにして活動してきたのである．これは，単なるスポーツを目的とする同好集団とは大きく異

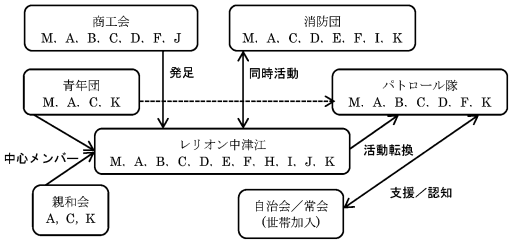

図 2　青年層の地域組織の関係性

なる点であろう．つまり，彼らが「レリオン中津江」という地域スポーツ組織に身を置くということは，単にサッカーをするということでも，同じ地域に住む者がスポーツをするために集まっただけの関係でもないのである．彼らは，日常的な仕事や地域に関わる関係性を維持する過程の中でスポーツという場に集まったものと理解される．そして，その関係性は，彼らが中津江村で繰り広げる日々の暮らしの中で，あるいは彼らが生まれる以前から切り結ばれた関係でもある．

次に，彼らの関係性を地域組織間の関係から捉え直してみたい．図 2 に青年たちが関わる地域組織の関係性を示した．それぞれの組織に参加している「レリオン中津江」のメンバーをイニシャルで示している．

まず，青年団→「レリオン中津江」→「パトロール隊」という流れにおけるメンバーの継承ということが確認される．2005年に解散した青年団には，M, A, C, K が在籍し，M と C はともに団長を務めるなど中心的存在であった．W 杯カメルーンキャンプでは，「カメルーン中津江ベースキャンプ実行委員会」の一員として，歓迎の立て看板作りを行うなどの活動を行っている．しかし，青年層の人口は年々減少し，2005年の日田市への合併を機に青年団は解散したのである．その頃，前述したように「レリオン中津江」が結成され，彼ら 4 人はチームに加わることになった．さらに，2010年に「レリオン中津江」の活動が停滞し始めると同時に，「パトロール隊」が結成され，「レリオン中津江」のメンバーの大半がそれに加わることとなった．ところが，このようなメンバーの継承は単線的に行われたのではない．そもそも「レリオン中津江」は商工会青年部がその発足のきっかけをつくり，一方で中心的メンバーは「親和会」などの地域組織で日常的な活動に取り組んでいた．さらに彼らは，消防団で活動し，自治会の体育部として地区のスポーツ大会などを運営していたのである．このように，多くの若者が村外へ流出していく中で，残されたメンバーは重層的に地域の組織活動に関わってきたのである．

また，彼らの間で切り結ばれる関係のあり方について目を向けると，次のようなことが指摘できる．それは，「パトロール隊」について M が「青年団の OB がいっぱいいるから，昔の青年団ですよ」と語るように，また最も若い C が「（参加することは）強制ですよ」（括弧内は筆者）と語るように，彼らの関係のあり方は青年団から引き継がれた強くて安定した関係性なのである[注20]．パトロール隊の活動では，車で巡回する 2 時間近くの間，彼らは子どもの結婚のこと，参加したお見合いツアーのこと，週末に村に現れた暴走族のこと，村の道路工事のことなどの会話に没頭しており，青年たちはそこでお互いの家族や地域のことに関する情報を共有していた．農林支援センターに勤務する者が，大阪から U ターンしてきた理由を，「ここには慣れがある」と言うように，彼ら青年層が集う地域組織には私生活にまで立ち入るような濃密で安定した関係のあり方が存在している．このような濃密で安定した関係のあり方が，重層化する地域組織の活動を通して青年層に共有され，このことが彼らに安定した暮らしをもたらしていると考えられる．

一方で，このような地域組織の重層的展開は，女性たちや高齢者の活動にも見受けられる．婦人会は合併を機に解散したが，それまでは「村で何をするにしても婦人会だったわけですよ」（G）というほどその存在は大きかった．解散後，地域での女性たちの活動は，地区や集落，サークル等に分散していった[注21]．しかし，元婦人会のメンバーはいくつもの地域集団に属し活動しており，青年層と同じようにそれぞれの活動場面で地域の情報が共有されていく仕組みがみられる．

高齢者についてみると，まず挙げられるのは集落の常会であろう．常会は世帯を加入単位としている伝統的地域組織の１つであるが，そこに集うのは高齢者がほとんどである．集落の衰退に伴い開催するところも減少しつつあるが，川辺や丸蔵ではほとんどの集落で行われているように，今なお多くの地域で存続している．ただし，本来の税金常会という意味で活動しているところはほとんど見当たらない．単なる寄り合いや自治会の下部組織的な会合，あるいは頼母子講として行っているところなど様々であった．先の高野（2009）が指摘したように，伝統的地域集団は衰退の傾向にあるものの，常会などは形を変えつつ現在も維持されているといえる．また，高野は，高齢者の地域活動の重層化と任意加入団体への参加の増加を指摘している．確かに，老人クラブやグランドゴルフ，ゲートボールなど個人の趣味・娯楽のための集団への参加が増加している．しかし，例えば丸蔵で行われているゲートボールは，だいたい木曜日の午後と決まっているが，ほとんどその通りに行われることはない．その都度，互いに連絡を取り，その時のメンバーの体調や気候，農作業の具合などにより変更され，集まるのも三々五々である．このように彼らの関係のあり方は，非常にゆるやかでありながら，安定したものなのである．それは，合理化・制度化されたあるべきスポーツの組織とは対極にあるようなあり方ともいえる．

ところで，中津江村においてこのような関係のあり方が引き継がれている証左の１つとして頼母子講[注22]（以下「タノモシ」と表記する[注23]）の存在があげられる．村では，今でもタノモシは若い世代を含め盛んに行われており，人によっては複数，多い人は７～８つのタノモシに参加しているということである．

筆者が参与観察した丸蔵のタノモシは比較的伝統的な方法に近いものであった．このタノモシは30年以上続くもので，現在15人が一口２万円の全22口で毎月開催している．「合わせくじ」でその月にお金を受け取る２名を決め，受け取った人は翌月から利子の500円を加えて払っていくことになっている．掛け金のやり取りが終わった後は，宴会へと移る．昼食をとりながら酒をかわし小１時間ほどの雑談が繰り広げられる．話の内容は，先のパトロール隊と同様，地域のこと，農作業のこと，そして互いの暮らしぶりなどが中心である．ほどなくするとゲートボールのリーダーらしき人が隣のコートで準備を始め，食事を終えた人が順次集まりプレーが始まる．ゲートボールの最中も地域のことや老人クラブのことなど取り留めもない話が繰り広げられ，なんとなく終了していく．

聞き取り調査によると，本来，タノモシは伊勢神宮へのお参りや子どもの進学や結婚，あるいは車の車検などある程度まとまったお金が必要なときに利用するものであり，丸蔵のタノモシが始められた30年ほど前は，村内でもそのような金銭的な相互扶助の意味合いの強いタノモシが多数みられたという．現在では，年金受給や給与の振込などで金融機関を利用する人が多く，金銭的相互扶助として行われるタノモシの数は少ないということであった．しかし，ここ中津江では形や方法を変えながらもタノモシが長年続けられているのである．比較的若い人たちの間では，月１回メンバーが集まり，積立金が集まった時点で旅行に行くものや順番で集まったお金を受け取るものなどがあるということであった．自営業を営むＧのご主人は，地域の人たち，ゴルフ，仕事関係など合わせると８つのタノモシをしており，それぞれに方法は異なるということであった．

タノモシに集うメンバーの関係について，鯛生の区長は「タノモシは強烈な関係がないとできない．１回で20万円ぐらいのお金が動くでしょ．それこそもらった翌月から来ないというのでは困るでしょ．だれも知らん人は入れないでしょ」と語る．川辺の区長も同様に「比較的近い世代であつまるが，世代の異なる若い人もはいっている．次の世代の人には積極的に道を譲るが，酒の注ぎ方やしきたりについては私たちがちゃんと教えますよ」とその関係の強さを示していた．また，野田の区長は「友人まではいかないけど，仲間という感じですよね」という言い回しをしている．つま

り，タノモシにおける関係性は，友情といった感情的側面だけで結ばれるのではなく，同じ地域に住む者同士，趣味を持つ者同士，あるいは同業の仲間としての共同関係がベースとなっていると考えられる．鈴木栄太郎（1968）によると，同じ講の一種である無尽を利益社会的であるとし，一方で頼母子講については共同社会的性格を有するものとしている（鈴木，1968，p. 346）．また，内山（2010）は「都市の共同体はお金を用いた助け合いの仕組みを講というかたちでつくりだしていた．私有財産であるお金を他者のために使う仕組みをである．自分たちとともに生きる世界をつくりあげるためには，それが必要だった」（内山，2010，p. 174）と述べている．今でも中津江村では，このようなタノモシを作り上げるような濃密で安定した関係のあり方が引き継がれているのである[注24)]．

このように見てくると，W 杯カメルーンキャンプにおいて，中津江村という共同体的な側面が表象されたのも，一つにはこのような濃密で安定した関係性が下支えとなっていたと考えられる．村長であったＳは，当時を振り返り「村民が動き出した」（坂本，2002，p. 95）として，様々な地域組織の自主的な取り組みを紹介している．また，「カメルーン中津江ベースキャンプ実行委員会名簿」（坂本，2002，p. 273）には，消防団，青年団，商工会，自治会（鯛生，丸蔵，川辺，野田），「五和会」，「一五会」，「女性の集い」など本研究でも取り上げた多くの地域組織が名を連ねている．ここまで確認してきたように，これらの組織活動は重層的に展開され，地域の情報を共有していく仕組みとなっていた．W 杯カメルーンキャンプは，村に潜在的に引き継がれてきた関係性の網の目の中で，それぞれの地域組織が連なる契機となり，一時的に村としての統一感を生み出したものと理解される[注25)]．

5. 農山村社会における地域スポーツ組織の社会的意味

現実的には，中津江村全体として経済が低迷し，村民の地域活動も一見衰退しつつある中で，W 杯カメルーンキャンプの実体的な効果は持続的なものではなかった．そのような流れの中で，「レリオン中津江」は活動休止に至ったのである．しかしそのことによって，地域スポーツ組織としての「レリオン中津江」の社会的意味が貶価されるべきものではないと考える．ここまでみてきたように，青年層の暮らしとの関連の中で捉え直すことにより，彼らに共有された関係のあり方の継承という意味を見出すことができたからである．それは縮小型社会における地域組織活動の重層化と中津江村特有のタノモシ的関係性が土台となっていることも分かった．

では，最後にそのような関係性の継承という視点を踏まえて地域スポーツ組織の社会的意味について検討してみたい．スポーツ公共圏を論じる松尾（2010）も「従来，スポーツクラブは，スポーツ愛好者による楽しみ集団として，居場所という『つながり』の機能を担ってきた」（松尾，2010，p. 166）として，人びとが共時的に結びつく場としての地域スポーツ組織を評価している．確かに，「レリオン中津江」は村の青年層を共時的に結びつけたスポーツの場として捉えられる．しかし，一方で松尾は，いかに「クラブ自身が私的生活圏から公共圏へと変容する」（松尾，2010，p. 179）ことができるかが重要であるとし，普遍主義的な個人の自由に基づく自律的連帯主義とスポーツの持つコミュニケーションの場としての機能が重要であるとする．つまり，ここでは地域スポーツ組織活動を通して目指されるべき関係のあり方が示されているのである．このような関係のあり方が構築されることによってのみ，当該地域社会における地域スポーツ組織の社会的意味が問われることになるのである．しかし，働く場を失い若者が次々と村外へと流出していく中津江村の青年たちにとっては，そのような新たな関係性を構築していくこともよりも，これまでの彼らの関係性をいかに引き継いでいくことができるかということが重要なのである．

W 杯サッカーという華やかな場面で，サッカーを通して元青年団のメンバーを中心に村の青

年層が結びつけられた「レリオン中津江」は，スポーツ活動の場としては消滅しつつあるが，そこで共有されていた関係性は現在のパトロール隊へと引き継がれたとみられる．それは，決してメンバーの自律的連帯主義のもとに内発的に展開されていく様相ではなかった．どちらかというと，日常的な暮らしの中に息づいてきた関係性が継承されていく過程の中で引き起こされたものであった．この時，スポーツの気軽さと実体的な関係性のあり方が，青年たちを結びつけていくグループの形成に重要な役割を果たしていたと考えられる．それは理念的に創りあげられた関係性ではなく，地域的事情を反映させるような実体のある関係性である．つまり，「レリオン中津江」という地域スポーツ組織は，村に「一定期間存続する団体」（鈴木，1968，p. 341）として存在することによって，そのような実体的な関係性を継時的につないでいく場としての社会的意味を担ってきたといえるのではなかろうか．

従来の地域スポーツ研究では，スポーツ組織が「地域に根ざし」（厨，1990，p. 18），いかに地域社会形成に寄与するかが「問題」とされてきた．それは，現代スポーツが地域の枠を超え，共時的に人びとを結びつけるという特徴を有するからであろう．現に，中津江村の青年たちも，サッカーというスポーツによって，彼らの結びつきの範囲を地区から村全体へそして合併後の日田市へと拡大させていった[注26]．しかし，そのようなメンバーの範域の拡大があっても，「レリオン中津江」は，村内の潜在的，日常的な関係の網の目の中に在り続けることで，青年層の関係のあり方を継承するという社会的意味を担ったと考えられる．これまでスポーツは地域社会形成という課題に対して過大な期待を背負わされてきたように思われる．本研究で明らかにされたことは，決してそのような期待に応えるようなものとは言えない．ここで示してきた「レリオン中津江」の社会的意味は，地域社会におけるスポーツを，相対的に自立した存在として捉えることによって見出されるものである．このような視点は，日本社会全体が縮小型社会へと転換していく中で，持続可能な地域社会と地域スポーツ組織の関係を検討する際に重要なものとなるであろう．

今回は，本論中で取り上げたそれぞれの地域組織に関する構造と変動過程の分析が十分であったとは言い難い．地域スポーツ組織との関連についても実証的な検証が不十分であった．このことについては，今後，中津江村の地域組織再編とスポーツ実践の関係という視点から継続した調査・分析に取り組み，今後の課題としたい．さらに，伊藤・松村がいう「潜在的な共同性」（伊藤・松村，2009a，p. 83）との関連において，都市空間を対象にした議論へと引き継いでいくことも必要であろう．

付記

本研究の一部は，2011年度笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものである．

注

注 1）　鯛生金山は明治時代に発見された金鉱山で，最盛期（1934年～1938年）には，年間産出量日本一に達した．1972年に閉山したが，1983年に地底博物館として開館し，2000年に道の駅登録，周辺の家族旅行村と合わせて金山観光施設となっている．

注 2）　松尾（2010）は「公共圏の成立を意図的，自覚的にクラブづくりの視点として組み込むことが重要なのである」（松尾，2010，p. 181）としその内発的発展に期待する．

注 3）　後述するように，「レリオン中津江」のメンバーは，元青年団であり，消防団やパトロール隊のメンバーでもある．パトロール隊における参与観察（2011.7.26）では，それぞれの生活の内部にまで深く踏み込んだ会話が展開されていた．また，彼ら青年層のグループで展開される会話からは，年齢を中心的基準として，出身集落，職業，親の職業などによる階層的な関係性が確認された．

注 4）　松村（1993）は，スポーツ活動よりも日常生活の維持にとって不可欠な様々な課題の共同による解決の手段に，より主要な親交的なコミュニティの源泉を見出すことができるはずという園部（1984）ら都市社会学からの「批判に応える努力をこれまでスポーツ社会学の研究者は怠ってきた」（松村，1993，p. 179）としている．

注 5） 森川（2002）は，松村への応答として，スポーツには労働の場や社会的共同生活手段などの地域の豊かさと住民の豊かさが不可欠であるとし，そのうえで，海老原（2000）のアソシエーション・スポーツ論や清水（1999）の「スポーツクラブの多くは，スポーツ好きの集まりであり，スポーツを行う場としてしか機能しない．しかし，スポーツによるまちづくりといっても，スポーツの力だけでまちづくりが果たされるわけではなく，スポーツを通じて醸成された連帯意識や自治意識が，他の生活局面に拡大・波及したり，地域社会で活動するスポーツ以外のグループ・団体との接触を通して，地域内のネットワークの和の中に入り込むことで，他の生活課題と同次元に位置付けられることが必要である」（清水，1999，p. 25）という主張に注目すべきであるとの見解を示した．しかし，これに対して伊藤（2009）は，そのような豊かな地域生活の基盤がなくとも地域社会においてスポーツを実践する人々が存在するとして，そうした構造的な「弱者」をも捉え得る「生活」把握が「スポーツ政策」を論じる際には必要であるとしている（伊藤，2009，p. 19）．本研究では厳しい生活課題を抱える農山村で実践されるスポーツを対象としていることから基本的にはこのような伊藤の認識と同じ立場に立つ．

注 6） 熊本日日新聞（2012年１月13日，14日付朝刊）における見田宗介インタビュー記事を参照されたい．

注 7） 都市社会学者の鈴木広（1986）も，スポーツ分析の問題性を「それだけを独立の行動状況として，他の諸生活行動から切り離して把握する近視眼的な危険性にある」（鈴木，1986，p. 460）と指摘している．また，広田ほか（2011）も同様に「スポーツを歴史的・社会的に意味づけられた活動として見たときに，他の諸活動との間で選択される活動の一つとして考察していく視点を持つことが必要ではないだろうか」（広田ほか，2011，p. 17）と指摘している．

注 8） 同様の主張は，以前から中島・上羅（1975），松村（1978），松村・梅沢（1986）によってなされてきたが，政策的・実践的課題への対応が優先されてきた現状においては大きな流れとなることはなかったといえる．

注 9） 前田（2010）によると，具体的には部落会や自治会が想定される．

注10） 2011年５月～2012年１月（計51日間）に現地調査を行った．調査期間に行った主な参与観察，聞き取り調査は以下のとおりである．

【参与観察】：丸蔵地区頼母子講，パトロール隊巡回・懇親会，鯛生・川辺地区神社祭り，川辺地区スポーツ大会・懇親会，中津江村ふるさと祭り

【聞き取り調査】S（中津江村元村長），H（元スポーツセンター所長），M（パトロール隊隊長），G（主婦，61歳），丸蔵区長（元役場職員），鯛生区長（元郵便局局長），川辺区長（自営業），野田区長（元役場職員）

注11） 中津江村の概要，産業，沿革に関しては，富来・河野（1981），大野（1982），齋藤（1982）の報告および日田市中津江振興局から提供された資料を参照した．大分大学教育学部では1982年に当時廃校になった小学校を引き取り「地域教育中津江研修所」を設立した．富来らの一連の調査・研究は研修所設立を機に実施されたものである．

注12） 人口，世帯，高齢化率に関するデータは日田市中津江振興局作成の資料に基づく．

注13） 1973年に完成した筑後川水系の下筌・松原ダム．ダム建設に伴って繰り広げられた日本最大級のダム反対運動「蜂の巣城紛争」の舞台としても知られている．

注14） 聞き取り調査によると，当時は，鯛生に映画館，クラブ，ダンスホール，病院，銀行などもあり，最も山深いところでありながら海産物なども容易に手に入ったといわれる．また，鯛生小学校は大分県で最も児童数の多い学校でもあった．

注15） 中津江村の班は概ね旧集落単位で構成されている．班の推移については，日田市中津江振興局作成の資料に基づく．

注16） 村外からの来住者は，金山閉山後はそのほとんどが村外への移住者となった．

注17） W 杯カメルーンキャンプについて尋ねると，ほとんどの人が中津江村のことや村人がテレビで取り上げられたことを現在でも誇らしげに話をしてくれた．

注18） 後述するように急激な勢いで過疎化が進む中津江村では，村内で若者の働く場が限られている．結成当時は村内に在住していたものの，その後，職を求め村外に転出せざるを得なかった者がいる．

注19） 図２に示す通り，Hは「レリオン中津江」以外の地域組織には参加していない．また，ＩとＪはそれぞれ商工会と消防団には籍を置くものの，村外に居住していることからほとんど活動してないという．

注20） 注３)でも述べたとおり，青年たちの会話の中には，年齢を中心的基準として，出身集落，職

業，親の職業などによる強い関係性が確認された．

注21）　例えば，商工会女性部，一五会，女性の集いなどがある．商工会女性部は村全体を範域とするメンバーで構成され，日田市合併時に婦人会が解散した後は，それまで婦人会に依頼されてきた事柄の多くが商工会女性部に任せられるようになったという．一五会は，栃原の女性の小さな会で毎月15日にタノモシ的に開催している．2005年に結成し，祭りやイベントの手伝いを自主的に行っている．女性の集いは1991年に結成され，主に文化的行事の開催や村民ホールの清掃活動を自主的に行っている．W 杯カメルーンキャンプではボランティアの中心的存在であった．

注22）　講は江戸時代に「遊行」を禁じられた修験者が各地に定住し，住民を組織する形で広がったとされる．内山（2010）によると，講は信仰集団であると同時に娯楽集団であり，また助け合い集団でもあったという．

注23）　中津江村の頼母子講は，本研究に示すように本来的な意味から大きく変化していることがうかがえる．そこで本研究では村民たちが表現するように「タノモシ」と表記することとした．

注24）　哲学者の内山（2010）は，このような現代の村にも伝統的に引き継がれる関係性のことを「小さな共同体」と表現している．彼によると，共同体とは「共有された世界をもっている結合であり，存在の在り方」であり，「共有されたものを持っているから理由を問うことなく守ろうとする．あるいは持続させようとする．こういう理由があるから持続させるのではなく，当然のように持続の意思が働くのである」（内山，2010，p. 82）としている．そのうえで，共同体を二重概念だとし，「ひとつひとつの小さな共同体も共同体だし，それらが積み重なった状態がまた共同体」（内山，2010，p. 76）であると述べている．このことを参照するならば，本研究で見てきた「レリオン中津江」や「パトロール隊」なども１つの「小さな共同体」としての解釈が可能である．

注25）　村では，前述したように金山観光施設建設，スポーツセンター建設，そして W 杯カメルーンキャンプと発展論的な地域振興の仕掛けづくりを行ってきた．この他にも，毎年１月に村の予算を使った村民総出の新年の宴会なども行ってきた（坂本，2002，p. 95）．このような行政からの働きかけが村民の一体感を醸成していくには，今回確認したような潜在的な関係性が必要である．「カメルーン中津江ベースキャンプ実行委員会名簿」（坂本，2002，p. 273）からは，本研究で取り上げた人物たちが複数の地域組織の一員として関わっていることが確認される．

注26）　M によると，日田市のウインターリーグに参加しているときは，日田市内などの近隣市町村からサッカー経験者が数名メンバーに加わっていた時期もあるという．

文　　献

海老原　修（2000）地域スポーツのこれまでとこれから―コミュニティ型スポーツの限界とアソシエーション型スポーツの可能性―．体育の科学，50(3): 180–184.

広井良典（2009）コミュニティを問い直す―つながり・都市・日本社会の未来．筑摩書房：東京．

広田照幸・河野誠哉・澁谷知美・堤　孝晃（2011）高度成長期の勤労青少年のスポーツ希求はその後どうなったのか―各種調査の再分析を通して―．スポーツ社会学研究，19(1): 3–18.

伊藤恵三（2009）「スポーツ政策」論の社会学的再検討―「スポーツ権」・「総合型地域スポーツクラブ」をめぐって―．秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学，64: 15–25.

伊藤恵三・松村和則（2009a）コミュニティ・スポーツ論の再構成．体育学研究，54(1): 77–88.

伊藤恵三・松村和則（2009b）団地空間における公園管理活動の展開とその変容：垂水区団地スポーツ協会の事例―．体育学研究，54(1): 107–121.

菊　幸一（2000）地域スポーツクラブ論―「公共性」の脱構築に向けて―．近藤英男編　新世紀スポーツ文化論．タイムス：大阪，pp. 86–104.

厨　義弘（1990）地域スポーツの変遷と新たな視点．厨義弘・大谷義博編　地域スポーツの創造と展開．大修館書店：東京，pp. 14–22.

前田和司（2010）スポーツ社会学における「生活論アプローチ」の課題．第19回日本スポーツ社会学会抄録集：pp. 24–25.

松村和則（1978）「地域」におけるスポーツ活動分析の一試論―宮城県遠田郡桶谷町洞ヶ崎地区の事例を素材として―．体育社会学研究会編　スポーツ政策論．道和書院：東京，pp. 65–98.

松村和則（1993）地域づくりとスポーツの社会学．道和書院：東京．

松村和則（2006）メガ・スポーツイベントの社会学．南窓社：東京．

松村和則・梅沢佳子（1986）「コミュニティ・スポーツ」

論の社会学―「自己反省の社会学」(Reflexive Sociology)に触発されて―．体育・スポーツ社会学研究会編　体育・スポーツ社会学研究５．道和書院：東京，pp. 49–70.

松尾哲矢（2000）公益法人「スポーツ振興事業団」の課題と可能性―スポーツの公共性とその生成―．体育の科学，50(3): 203–208.

松尾哲矢（2010）「つながり」の方法としてのスポーツクラブとコミュニティ形成．松田恵示・松尾哲矢・安松幹展編　福祉社会のアミューズメントとスポーツ―身体からのパースペクティヴ．世界思想社：京都，pp. 164–186.

見田宗介（2012）熊本日日新聞，１月13日付朝刊，成長依存から方向転換を．１月14日付朝刊，持続可能な精神の成熟へ.

森川貞夫（1988）必携・地域スポーツ活動入門．大修館書店：東京.

森川貞夫（2002）コミュニティ・スポーツ論の再検証．体育学研究，47(4): 395–401.

中島信博（2000）総合型地域スポーツクラブの展開と地域社会の基盤―岩手県金ケ崎町での聞き取りから―．日本体育学会第50回記念大会特別委員会編　21世紀と体育・スポーツ科学の発展．日本体育学会第50回記念大会誌１．杏林書院：東京，pp. 126–130.

中島信博・上羅　広（1975）地域社会におけるスポーツ―香川県坂出市林田地区における事例研究―．体育社会学研究会編　コミュニティ・スポーツの課題．道和書院：東京，pp. 67–86.

大野保治（1982）大分県日田・津江地区の法社会構造（緒論）．大分大学教育学部研究紀要，6(2): 1–14.

齋藤　事（1982）日田郡中津江村の産業．大分大学教育学部研究紀要，6(2): 15–24.

坂本　休（2002）カメルーンがやってきた　中津江村村長奮戦記．宣伝会議：東京.

清水紀宏（1999）街づくりとスポーツ．文部時報（1495）: 22–23.

園部雅久（1984）コミュニティの現実性と可能性．鈴木広・倉沢進編　都市社会学．アカデミア出版会：京都，pp. 316–342.

鈴木栄太郎（1968）日本農村社会学原理　上下．未来社：東京.

鈴木　広（1986）都市化の研究．恒星社厚生閣：東京.

高野和良（2009）農村高齢者の社会参加によるアクティヴ・エイジングの実現に関する評価研究．平成17年度平成19年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書（課題番号：17530427）.

玉野和志（2005）東京のローカル・コミュニティ．東京大学出版会：東京.

徳野貞雄（2010）ブラックボックス化する『地域づくり』と『モエ』集団．季刊　中国総研，vol. 14–4 (53): 15–23.

徳野貞雄（2011）生活農業論―現代日本のヒトと「食と農」．学文社：東京.

富来　隆・河野昭夫（1981）過疎化による「むら」の危機：津江地域の教育をめぐって．大分大学教育学部研究紀要，5(6): 63–80.

内山　節（2010）共同体の基礎理論．農山漁村文化協会：東京.

山本　努（1998）過疎農山村研究の新しい課題と生活構造分析．山本　努・徳野貞雄・加来和典・高野和良共著　現代農山村の社会分析．学文社：東京，pp. 2–28.

山本　努・徳野貞雄・加来和典・高野和良（1998）現代農山村の社会分析．学文社：東京.

矢作　弘（2009）「都市縮小」の時代．角川書店：東京.

（平成24年５月31日受付
平成25年３月18日受理）

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2013/4/12